中村　哲

[redacted]

祈りを力へ（最後の手紙）

みなさま，1983年以来，パキスタン・ペシャワールでの働きに祈りを以てお支え下さり，ありがとうございました。おかげさまで，現地では殺伐な情勢の中，心和む日本との交流が芽生えました。

ペシャワール・ミッション病院のらい病棟は，名実共に北西辺境州のらいセンターとしての位置を獲得し，当地では避けて通れぬアフガニスタンのらいの問題にもくいこむことができました。

私たち自身も，「ペシャワール」を通して様々な事を学ぶことができました。少なくとも，私の仕事を直に支えた者たちは，働きによって変えられて来たと思います。私たちは，「世のため人のため」と叫ばず，「貧しい人に愛の手を」という歯の浮くような事を言わぬようになりました。「分かち合う」事の中にこそ我々の本当の意義があり，活動を支えて来た積りが実はそれによって自分たちが支えられていたのだと多くの仲間たちは今気づかされております。

ＪＯＣＳは戦争の贖罪の気持ちから出発したといわれておりますが，戦争はペシャワールにおいて極めて身近な問題でした。平和とは何か，繁栄とは何か，文明とは何か，さらに人間とは何か，それらの本質的な問はまのあたりの挑戦でした。すべてのこざかしい理念や理屈は圧倒的な現実の前には空々しく，ただ我々は時にはあわて，時には沈黙し，「平和」に向けて出来ることをコツコツと積み上げてゆくのみでした。

そして，その努力はこれからも営々と続けられてゆくでしょう。オキナワ，ナガサキ，炭鉱の閉山，ＣＯ中毒，水俣，農村の分解と，郷土における日本近代化の蛮行の犠牲と同様，我々は「ペシャワール」にこだわります。スマートに総括して引き揚げる器用さを我々は持ちません。

我々は活動を継続することによって，人間たちの静かな告発者であり，弁護者であり続けるでしょう。今後も現地と他ならぬ日本の為にお祈りください。

さようなら。みなさまの各持ち場でのお働きを祈っております。

1990年７月23日

中村　哲